

# 獅子窟寺蔵薬師如来坐像造立考

西木 政統（慶應義塾大学）

獅子窟寺蔵薬師如来坐像は、優れた作行によって広く知られており、大阪府に伝来する如来形彫像としては唯一国宝に指定されている。しかし、関連史料に乏しく、両手先を後補とすることもあり、これまで本格研究に恵まれていない。尊名や制作年代に定説を見ていないほか、制作背景に至っては、ほぼ検討されてこなかったといつてよい。本発表では、その図像的特質および様式的特徴の再検討により、本像の尊名と制作年代を改めて考察したうえで、交野という伝来地に注目して、制作背景にまで論及したい。

従来、本像の尊名に関しては、印相（後補）から漠然と薬師如来とされてきたが、当初の印相を説法印とみて、阿弥陀如来とする意見も出されている。本発表では、印相についての検討だけでなく、坐法および服制の視点も尊名比定に有効であると考え、総合的に本像の図像を考察したうえで、薬師如来である蓋然性の高いことを指摘する。

制作年代に関しては、9世紀から10世紀にかけて諸説あり定まっていなかった。この点については、まず面貌表現の検討から唐代や統一新羅の造像、或いは檀像系造像との関連を指摘し、制作技法については、特異な別材寄せに一木より彫出する意識を、更に乾漆製の螺髪を植え付けることに、乾漆系造像との技法的な交流を改めて確認する。従来は年代を下げる根拠とされてきた装飾的な衣文表現についても、広く衣文表現の傾向を分析した結果、檀像の影響を認め、類例においても古様なものと判断し得ることを主張したい。以上の様式的特徴の検討から、制作年代は9世紀前半に求める。

最後に、制作背景について考察を試みる。本像の伝来する交野の地においては、歴代天皇の行幸が数多く見られるが、なかでも桓武天皇や文徳天皇による、北辰祭祀儀礼である郊祀が注目される。郊祀の祭祀対象である昊天上帝、即ち北辰に対する信仰には、その目的、供養法、地理的特徴、更には図像に至るまで諸点において薬師如来の信仰との共通点が認められる。また、郊祀の導入に功績があったと考えられる交野の渡来系氏族、百濟王氏は、朝鮮半島から最新の情報を入手し得る立場にあり、唐様の強い本像の造立を考える際に、彼らの関与を想定することは不自然ではない。また、水害に悩まされていたという地理的条件を考慮すると、本像が災害防止を祈念して造立された可能性も考えられる。

以上、伝来の不確かさ、両手先が後補であることなどから、これまで積極的に論じられてこなかった本像について、新たな観点より検討を加えることで、美術史上に積極的な位置づけを行うことが可能であると考えられる。